

文部省 科学研究費助成研究

国際学術研究2件、重点領域2件、基盤研究13件、奨励研究3件、データベース1件の計21件が採択された。

◆中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究

代表者・田中 琢 国際学術研究 新規
中国・陝西省西安市周辺には、唐代を中心とした古墳壁画が多量に現存する。古墳内部から剥ぎ取った多数の壁画が陝西歴史博物館その他の機関に保管されている。これらの移設した壁画について、壁体の強化方法、顔料の褪色・剥落防止対策の研究、ならびに考古学・美術史学・建築史学の総合的な調査研究をおこなう。

◆陶磁器文化の交流に関する科学的研究

代表者・沢田正昭 国際学術研究 新規
日本・韓国・中国・東南アジア地域で生産された陶磁器について、その胎土や釉薬を分析し、考古学・美術史学的調査をおこない、陶磁器文化の交流圏の確認と交流の実態を究明する。わが国では、全国各地にこれらの陶磁器が大量に出土し、あるいは伝世している。また、スミソニアン研究機構関連機関でも数多くの東洋陶磁器を所蔵しており、分析・調査に関する共同研究をおこなう。

◆二条大路木簡データベース

代表者・町田 章 データベース 繙続
長屋王家木簡データベース作成グループは、長屋王家木簡に引き続き、1994年度以来研究成果公開促進費(データベース)の支給を受け、7万点余にのぼる二条大路木簡のすべてについて、文字情報と画像とをリンクさせたデータベースを作成すべく、作業を進めている。

◆遺跡探査法の総合的開発研究

代表者・西村 康 重点領域(1) 繙続
表記研究の総括班として、研究推進と公表、普及を任務としてきた。平成4年度に開始した本領域研究は平成8年度をもって終了したが、研究に参加した研究者が中心となって、日本文化財探査学会の設立、第2回国際遺跡探査学会の日本開

催などに取り組む予定である。

◆集落、埋納遺跡の探査

代表者・西村 康 重点領域(2) 繙続
広域遺跡である集落、寺院、官衙遺構を効率良く正確に推定して、遺跡調査とその保存に役立つ資料を提供すること、弥生時代を中心とする青銅遺物の所在推定とを目的とする。地中レーダー探査の方法を中心に、電気探査、磁気探査、電磁誘導探査の方法を併用すれば、必要な地下情報が採取できることを確認できた。

◆トイレ遺構の総合的研究

代表者・黒崎 直 基盤研究A 繙続
トイレ遺構の認定手法および研究の方法を考古学を中心にして、関連する諸分野と共同研究する。3年継続の2年目。総合研究会を開催し、発掘された遺構や遺物について検討した。加賀地方の一例では、水洗式からくみ取り式への転換がたどれ、それは人糞肥料の利用開始を暗示する。また土器に付着する「尿酸塩」の析出から「しごん」の存在を考え、寄生虫卵とともに古墳時代の木樋遺構が出生儀礼と関連する可能性などを検討した。

◆常時微動測定による古建築の構造安定性に関する研究

代表者・内田昭人 基盤研究B 繙続
伝統的木造建築物の振動特性を把握することを目的とし、法隆寺建物4棟について常時微動測定をおこなった。五重塔は1次の固有振動数0.90Hz(ヘルツ=1秒間の振動数)で水平に揺れながら、同時に2次2.50Hzの振動数で弓形にしなる動きをしていた。減衰定数は4.0%である。1次、2次の固有振動数と減衰定数は、金堂:1.80Hz・4.4%、2.07Hz・1.7%、中門:1.56Hz・4.4%、1.80Hz・2.6%、大講堂:1.70Hz・2.5%、2.10Hz・1.9%である。

◆古代東アジアにおける冠位制度の考古学的研究

代表者・毛利光俊彦 基盤研究C 繙続
前年度から継続していた日本・朝鮮冠の資料集成についてはほぼ完了し、今年度は中国東北部・蒙古・西域の資料を多く収集した。主研究としては伽耶冠を取りあげ、洛東江以東の諸小国では新羅の影響を受けて、6世紀前半に冠位制の原形

が形成されたが、洛東江以西の諸小国(大伽耶連盟)では562年の滅亡時まで未成熟であったことを推論した。成果論文に「朝鮮古代の冠 ～伽耶」(『堅田直先生古稀記念論文集』1997年3月)がある。

◆北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究

代表者・浅川滋男 基盤研究C 繙続
2年目の本年度は、主として中国東北地方におけるツングース・満州語派の狃い手たちの住居に関する資料を収集した。また、住宅総合研究財団の助成金により、黒龍江省の小興安嶺一帯で、エヴエンキ族およびオロチョン族の住居を調査した。その結果、満州族系の平地住居にみられる万字炕(コ字形の床暖房施設)と神棚の配置関係が、円錐形テントの空間構造を踏襲したものであることなどが、あきらかになった。

◆和鏡の生産と流通 ～出土鏡・鋳造遺跡から見た考古学的考察

代表者・杉山 洋 基盤研究C 繙続
3年にわたる研究によって、下記のような点が明らかになった。1)まず研究の第一として、全国にわたる和鏡の出土例を調べ、そのデータベース化を計った。これによって、近年の発掘調査の進展によって、多くの和鏡が発掘されるとともに、その出土の現状が把握されるようになった。成果として、全国歴史時代鏡一覧表を作成した。2)これらの出土資料の中から、最も研究上重要である2遺跡、三重県鳥羽市神島と宮崎県南郷村神門神社の出土鏡を調査し、写真撮影を中心とする調査をおこない、資料を作成した。3)第二に全国的に検出例の多くなってきた和鏡の鋳造遺跡を報告書等で抽出するとともに、出土品の実査をおこなった。その結果、京都市内における検出例の豊富さから、中世京都における和鏡鋳造が七・八条周辺を中心に活発であったことが判明すると共に、鋳型の構造などに、時代による変化のあることが判明した。

◆弥生時代と古墳時代の祭祀の比較研究

代表者・岩永省三 基盤研究C 繙続
古代国家形成期であった弥生～古墳時代における社会の動態の一面を、祭祀の分析からあきらかにし、とくに集団祭祀の

出現・展開・消滅の様相と、首長権継承儀礼の出現・展開の様相との有機的連関を追究した。集団祭祀の動向は、首長層の政治的権力者としての成長と密接に関連するが、最終的消滅は各集団内部での自律的契機によるものではなく、西日本の広域にわたる首長層の連合の結成にともなう疑似的集団祭祀としての集団再生祈願儀礼の成立を前提とする。

◆古代の地方末端における官衙遺跡の研究 代表者・山中敏史 基盤研究C 繼続郡衙以下の「官衙的遺跡」を整理すると、いずれも、国郡衙から相対的自律性をもった郷衙とは見なしがたく、郷長や郷雜任らが郡司の指揮下に郡衙機構の機能の一部を分掌した場であり、郷雜任や郷長らの活動の拠点は、本来的には郡司の直接的な管轄下に置かれた郡衙出先施設や居宅などに併設された官衙補完施設であったと考えられる。

◆郷衙、郷長宅に関する考古学的研究

代表者・松村恵司 基盤研究C 新規律令制下地方行政組織の最末端に位置する郷に、「郷衙」とよぶべき行政の拠点施設が存在したか否か、その論争の再検討を目的とする。「郷長」「里長」墨書き土器、刻書き錘車などを手がかりに、郷長の居宅の構造をあきらかにし、古代集落遺跡の中にみえる官衙的要素を摘出し、その性格を考究する。初年度は郷長関連文字資料と13遺跡の構造分析をおこなったが、郷長の経済的優位性は認められず、郷長居宅に付随するような官衙的施設も抽出できなかった。これらの事実は、郷長が白丁から任用され、律令官人機構の中に組込まれなかった事実と符合する。

◆製作技法と同范関係からみた中世瓦の本格的研究

代表者・山崎信二 基盤研究C 新規全国の中世瓦を製作技法を中心として8期に細分した。近畿では京都系・大阪(摂津・和泉)系・大和系の三者が独自性をもち、播磨・紀伊・河内ではこの三者の系統が地域によって交錯した状況を示す。関東も同様で、鎌倉的なものをぞくと、武藏系・上野下野系・常陸系に分かれ、それぞれは近畿の大坂系・京都系・大和系に対応するが、時期によっては他系統

へ移るものがある。

◆古代におけるガラス及びガラス製品製作に関する基礎研究

代表者・川越俊一 基盤研究C 新規日本における古代のガラス及びガラス製品生産の歴史的位置付けをあきらかにするために、砲弾形ガラスルツボと小玉用鋳型の出土資料を中心に分析をおこなう。分析を通して、砲弾形ガラスルツボは7世紀後半に出現し、祖形は朝鮮半島に認められること、鋳型は3世紀から8世紀まで変化のないことが判明した。その結果、日本でのガラス製造・製品生産は、7世紀後半に変革期が認められ、その技術は中国大陆や朝鮮半島を通して導入されたとの見通しをもった。

◆歴史的建造物保存修復技術の考え方と方法 ～地方文化財修復指針案の作成

代表者・木村 勉 基盤研究C 新規建造物保存修復技術の基本的な考え方と方法について、重要文化財の場合と比較検討しながら、各地の地方文化財の状況を実地調査して分析する。地方文化財にふさわしい保存・修復のあり方を、事業の体制、当初の計画、修復時の調査、調査結果の分析と修復方針の検討、実施計画と修理工事、記録の作成などの項目によって検討のうえ、指針案『地方文化財保存修復技術の考え方と方法』を作成する予定。調査を明治以降の洋風建築にしおり、1996年度は北海道・東北地域を調査した。

◆日本古代の湧泉、流れ遺構の研究

代表者・高瀬要一 基盤研究C 新規近年、奈良県を中心とする地域において発見された7ヶ所の4~8世紀代の湧水施設と、そこから流れ出る水を導いた水路の遺跡について、その形態、構造、立地、水源、石組み、祭祀遺物などを分析し、遺跡の特色、性格をあきらかにすることを目的としている。初年度は7ヶ所の遺跡について現地調査と資料収集、整理作業をおこなった。

◆中近世期における金工材料と製作技法の歴史的変遷に関する研究

代表者・村上 隆 基盤研究C 新規中近世期の遺跡から出土する金工品を対象とする材料科学的な見地からの調査に

より、当時の金工製作に用いられた材料とその技法を探ることを試みている。たとえば、黄銅タイプの合金が、小柄などの刀装具やキセルなどに対してすでに16世紀中頃には使用されていたことを確認できた。伝世資料を中心とした従来の美術工芸史的視点に、本研究の成果を加えることで、日本における金工技術史を体系化することを目的としている。

◆飛鳥奈良時代における畿内と東国との交流の研究

代表者・次山 淳 奨励研究A 新規律令国家による地方支配の実態を解明するうえで、東国経営の形態、とくに蝦夷と呼ばれた人々との相互の交渉のありかたを分析することは重要な視点のひとつである。本研究では、飛鳥石神遺跡に東国からもたらされた内面黒色土師器や「夷」字墨書き・刻書き土器等の考古資料を中心に関連する資料の集成と分析をおこなった。また、この成果により飛鳥資料館特別展示『齊明紀』の一部を構成した。

◆太政官公文録中の建築仕様書からみた明治初期木造洋風建築の設計寸法に関する研究 代表者・長尾 充 奨励研究A 新規本研究は、洋風建築とともに日本に紹介されたメートル法、ヤード・ポンド法などの洋式尺度の建築設計寸法への採用状況と、伝統的な設計寸法への影響を、官庁関連の建築仕様書を通して解明することを目的とした。対象とした木造建築の仕様書136通には、洋式尺度を記す仕様書は皆無で、和式尺度への換算値もみいだせない。明治初期官庁官舎では、洋風建築も和式尺度で設計され、伝統建築への影響もきわめて小さかったことがあきらかになった。

◆近世中期における江戸の緑地学的研究

代表者・平澤 毅 奨励研究A 新規本研究の目的は、近世中期の江戸を対象として、都市の緑地的空間利用のあり方を主に文化史・制度史の面からあきらかにすることである。とくに、享保期の江戸における公園的空間の成立は注目にあたいする。これらの空間は、火除地広場や公共の園地に代表されるものであり、享保改革の地域政策と密接な関連をもつて発展する過程をあきらかにした。